

Steven Meyer: *Irresistible Dictation:
Gertrude Stein and the Correlations of
Writing and Science*

Stanford: Stanford University Press, 2001. xxiii + 450 pp.

長畑明利

スタインの文章は全く意味が分からないという困惑、あるいは、それは気が狂った人間の文章だといった非難は、スタインの作品が雑誌に掲載されるようになった1910年代から繰り返されてきた。たとえば Wyndham Lewis はスタインの創作を嘲笑の対象として憚らなかつたし、スタインの文体のパロディも数多く出回った。1934年には、スタインがアメリカで講演旅行をしているさなか、*Newsweek* 誌が医学博士 Morris Fishbein の、スタインが *Tender Buttons* (1914) に収録された作品に見られるような特異な文章を書くのは、彼女が encephalitis (脳炎) の後遺症である palilalia なる状態にあったからだと論じる大まじめな記事をも掲載している。ダダやシュルレアリスム同様、こうした非難・無理解はアヴァンギャルド芸術・文学の宿命と言えるが、しかし、スタインの奇妙な文章は一方で数多くの読者を引きつけ、また他方、そこには何らかの意図が込められているに違いないという知的関心を育んできたのも確かである。1960年代後半から活発になるスタインの学術的研究の歴史においても、その主たる関心は、たとえば “Rhubarb is susan not susan not seat in bunch toys not wild. . .” (*Tender Buttons*, “Rhubarb”) といったスタインの特異な文体には、一体どのような意図が隠されているのか、あるいは、そこにはどのような意義を認めることができるのかという問いの探求であったと言ってよい。

たとえば、スタインの実験はピカソをはじめとする同時代の前衛絵画の試み

を言語を用いて行ったものだとする解釈も、そのような隠された意図の解釈の一例に他ならない。あるいは、1970年代後半以降顕著になった、脱構築理論を援用してスタインの作品に見られる言語の戯れを評価しようとする批評や、スタインの文体が家父長制を体現する規範的な文章を突き崩す女性的な文体であると主張するフェミニズム批評も、あるいはまた、彼女の文章はレズビアンlesbianの code language なのだとする解釈も、同様に、スタインの文章が示す特異性を分かりやすいものにし、またそれを擁護しようとする試みであったと言える。

こうした説明と擁護の試みは、1990年代以降も継続され、従来に増して興味深い見解が提出されている。その中で顕著になってきたように思われるのが身体論を援用した批評である。すでに1985年には Catharine R. Stimpson が “The Somagrams of Gertrude Stein” で、また1990年には Lisa Ruddick が *Reading Gertrude Stein: Body, Text, Gnosis* で、スタイン批評における身体論批評に先鞭を付けているが、これらの研究は、スタインがハーヴァードで教えを受けた William James の心理学に代表される「科学」との訣別を、男性的な論理性・実証性との訣別と捉え、反復を一つの特徴とするスタインの文体実験を、それに対峙する本能的な身体運動の顕現とみなすものであった。

2001年に出版された Steven Meyer の *Irresistible Dictation: Gertrude Stein and the Correlation of Writing and Science* も、同様にスタインの創作を身体論の観点から考察するものである。しかし、マイヤーはラディックらとは異なり、スタインの身体的要素への着目を、まさにラディックが否定したウィリアム・ジェームズの思想の延長線上に置いて論じている。サブタイトルに現れているように、本書には、近年スタイン文学の本質の対極に置かれることの多い「科学」が、実は彼女の文学的実験の核心において極めて重要な位置を占めていたのだという主張が窺われる。

本書は3部構成をとっている。第1部 “The Neurophysiological Imagination” は、“Ecstatic Science: Natural History of the Soul” と “Beyond Organic Form: Gertrude Stein and Johns Hopkins Neuroanatomy” からなり、スタインの前衛作品とジェームズの心理学およびスタインが学んだ神経解剖学・神経生理学との類縁性が論じられる。第2部 “The New Organism” は、“Line

of Divergence: Emerson and Stein”と“‘At the Whiteheads’: Science and the Modern World”を収録し、スタインとエマソンおよびホワイトヘッドとの共通性を明らかにしようとする。第3部“Stein and William James”は、“Writing Psychology Over: Toward a More Radical Empiricism”, “Every Field Incomplete: Mapping ‘The Very Abysses of Our Nature’”, “‘The Physiognomy of the Thing’: Sentences and Paragraphs in Stein and Wittgenstein”および“Conclusion: ‘Sentences Singing Themselves’”を収めている。全体を貫くキーコンセプトは、「科学」, 「神経生理学」そして「ラディカルな経験主義」(radical empiricism)と言えるだろう。本書の中心をなすと思われる第1部を簡単に紹介してみよう。

マイヤーは第1章で、ジェイムズの思想のスタイン文学への影響を論じるが、その際に彼が注目するのはジェイムズの「ラディカルな経験主義」の主張である。この概念は多岐にわたるジェイムズの思想の様々な領域に関連するものだが、マイヤーはその中でも、ジェイムズの「情動」(emotion)の生成に関する記述に読者の注意を喚起する。「情動」の生成に関して、ジェイムズは1894年の“The Physical Basis of Emotion”において、“My thesis is that the bodily changes follow directly the perception of the exciting fact, and that our feeling of the same changes as they occur is the emotion.”と言う。これは、情動は先験的に存在するものではなく、あくまで外部からの刺激に基づいて、つまり経験的に生じるものだが、しかし、重要なのは外的刺激の知覚のみではなく、それが引き起こす我々の身体的変化であるという主張である。スタインが応用したのはまさにこの点にある、とマイヤーは主張する。後に *Tender Buttons* に収録されることになる作品を書く際に、スタインは情動の生成プロセスをめぐるジェイムズの「ラディカルな経験主義」を換骨奪胎し、「書くこと」(writing)において、通常 a priori に措定される「意味」がいかに a posteriori に——つまり経験的に——構成されるのかを追求したのだと言うのである。

その具体例は第2章で示される。マイヤーは、綿密な調査に基づいて、スタインがジョンズ・ホプキンス大学で行った神経細胞に関する実験の詳細を明らかにする(たとえばマイヤーによれば、スタインが研究対象としたのは、脳内

部の Darkschewitsch と呼ばれる部位であったという)。実験を通してスタインは、神経細胞は従来信じられていたように解剖学的に一つに繋がっているのではなく、実はそれらは互いに分離しているのだという発見に興味を惹かれることになる。分離してはいるのだが、個々の細胞は接続されてシグナルを送るのだというこの神経体系のメカニズムを、スタインはその文体実験において、意味生成のメカニズムの探求に適応した、とマイヤーは主張する。たとえば *Tender Buttons* において、スタインは、本来何の結びつきも持たぬ単語と単語が——たとえば *tender* という単語と *buttons* という単語が——接続されて一つのユニットを形成し、それが何らかの機能を果たす（つまり何らかの意味をもたらす）様を示そうとしている。しかしそれはまさに、本来連続性を持たぬ神経細胞と神経細胞が接続されて、そこに電流が流れシグナルが送られるという神経体系のメカニズムのアナロジーに他ならない。そして、まさにこうした身体的なプロセスがもたらすものこそが情動であり意識であるとする見解を踏まえるかのように、スタインは単語と単語の接続によって意味が経験的に生成される様を探求していたのだ、とマイヤーは論じる。

さて、マイヤーのこうした主張に見て取れるのは、スタインの言語実験の意義は次のことにあるとする見解である。すなわち、ものを書く際に起こるのは、それによって、a priori に措定される書き手の内面あるいは意味が表出されることではなく、むしろ言葉と言葉が書き手の内面からは独立した状態で結びつくことによって、何らかの意味が a posteriori に生まれることである、という見解である。実際マイヤーは、本書の冒頭で、「創作は紙とペンの間に生まれる」というスタインの発言を引用しているが、この発言は、「書くこと」に関するスタインの興味が、書き手自身あるいは書き手以外の人の内面の表出ではなく、書き手の内面からは独立して言葉が自律的に意味を生成することにあつたということを示唆している。

マイヤーがスタインの言語実験に見出すのは、まさにこのような autopoietic な言語の働きである。言うまでもなく、この視点は、20 世紀末にアメリカの言語詩人 (L = A = N = G = U = A = G = E poets) たちが「書くこと」の意義について繰り返し述べていた見解と符合する。一篇の詩が何によって成立している

かについて、言語詩人の一人 Ron Silliman は次のように言う。

それはイメージでもなく、声でもなく、登場人物でもプロットでもない。これらのすべてが紙の上に、あるいは口の中に現れるのは、ただ一つの特定の媒体、すなわち言語そのものの請願によるのだ。(In the American Tree, xiv)

言語詩人たちが言語の autopoietic な意味生成に着目したのは、彼らがポスト構造主義思想の影響のもとに、「書くこと」から書き手の自我を消滅させようとしたためであった。彼らが自分たちの試みの先駆者として評価するスタインの場合、その理由はむしろ神経生理学の研究によって得られた知見の応用にあったのだ、というのが本書におけるマイヤーの主張である。

本書は、ジョンズ・ホプキンス大学でスタインが行った神経生理学の実験などに関する夥しい資料を駆使して書かれており、アメリカの文学研究におけるリサーチの徹底ぶりを実感させてくれる。同時に本書は、文学と心理学と神経生理学の領域がオーヴァーラップする学際的研究の成果でもあり、今後のスタイン研究の方向性を占ううえでも参考になる。神経生理学の用語は易しくはないが、今後は文学研究におけるこうした他領域の取り込みがより一層盛んになるのだろう。なお、タイトルの *Irresistible Dictation* はエマソンのエッセイ “Fate” 中の言葉——“If there be irresistible dictation, this dictation understands itself” ——に拠る。